

修士論文（要旨）  
2011年1月

高齢者の家庭内事故に関する意識  
—転倒事故とでき水事故について—

指導 長田久雄 教授

老年学研究科  
老年学専攻  
209 J 6007  
豊田文延

## 目次

I. はじめに	
1. 研究の背景	1
2. 先行研究	1
3. 目的と Research・Question	5
4. 意義	5
5. 用語の定義	6
II. 方法	
1. 調査対象者	6
2. 調査の方法	6
3. 質問紙の構成	6
4. 分析の方針	8
5. 倫理的配慮	9
III. 結果	
1. 基本属性について	9
2. 認識の調査	10
3. 実行度の調査	10
4. 認識と実行度の乖離について	11
5. 予防対策を実行しない理由と実行度の調査	12
6. (1)転倒しそうになった足元の状態・(2)原因の調査	14
(3)でき水事故を起こしそうになったときの原因の調査	14
7. 居宅の改修場所の調査	14
IV. 考察	
1. 基本属性について	14
2. 認識の調査	14
3. 実行度の調査	15
4. 認識と実行度の乖離について	15
5. 予防対策を実行しない理由と実行度の調査	17
6. (1)転倒しそうになった足元の状態・(2)原因の調査	19
(3)でき水事故を起こしそうになったときの原因の調査	20
7. 居宅の改修場所の調査	20
V. まとめ	21
VI. 謝辞	22
引用文献	23

資料：表

付録資料：アンケート本文

## I. はじめに

### 1. 研究の背景

わが国は 2009 年に「本格的な高齢社会」となっている<sup>1)</sup>。国の人口動態統計では、家庭内の不慮の事故は高齢者が多く、種別では溺死でき水が多い<sup>2)</sup>。東京消防庁の不慮の救急事故の統計では、高齢者は転倒事故が多く場所は居間が多い<sup>3)</sup>。調べた限りでは、家庭内事故の体系や分析方法が明確でないと思う。高齢者自身の事故予防に対する意識について、労働災害分析の 4M 要因<sup>4)</sup>を応用して、対策上で価値がある情報が得られると考えられる。

### 2. 先行研究

転倒事故とでき水事故の研究論文と統計や調査研究報告書の把握により、本調査の質問項目に利用できた<sup>5) ~24)</sup>。家庭内事故に 4M 要因を使う意識調査は見当たらなかった。

### 3. 目的と Research・Question(以下、略称 RQ)

高齢者の家庭内事故の予防に関する認識と実行度や乖離、実行しない理由について明らかにしたい。労働災害の 4M 要因分析を応用して、4M 要因の相違や有用性の手掛かりを調査する。RQ については、高齢者の認識や実行度の程度、乖離があるのか、実行しない理由は何かなどである。

### 4. 意義

高齢者について、家庭内事故の防止対策に関する認識と実行度について、乖離の有無や実行しない理由を要因別に調査分析する。そして、事故防止の推進課題を探り提示することは、家庭内事故の予防対策を推進することに資するという意義がある。

### 5. 用語の定義

「家庭内・転倒事故・でき水事故」について、消防庁の定義で質問紙用に改変した。

## II. 方法

1. 調査対象者: 質問紙配布は高齢者セミナーに参加した 60 歳以上の高齢者男女 131 名であった。2. 調査の方法: 無記名自記式質問紙により、回収者全員 110 名を分析対象者とした。

3. 質問紙の構成: 基本属性、転倒事故及びでき水事故予防対策の認識と実行度、実行しない理由、事故を起こしそうになった経験と原因の質問などである。

### 4. 分析の方針

統計調査データの収集後、PASW statistics を用いて、質問項目の単純集計をして度数分布表を作成した。事実の数値により考察を行い、乖離について対比表により考察した。

### 5. 倫理的配慮

セミナー開催前に、学園主催者と対象者に対して、倫理規定に沿った内容の書面と口頭説明で許可を得てアンケート配布した。回答中止と提出の自由の説明をして同意を得た。

## III. 結果

1. 基本属性、2. 認識の調査 3. 実行度の調査、4. 認識と実行度の乖離について、5. 予防対策を実行しない理由と実行度の調査、6. 転倒しそうなった足元の状態・原因、でき水事故を起こしそうなったときの原因の調査、7. 居宅の改修場所の調査、について度数分布の各表により、数値の事実を結果として論述した。

## IV. 考察

結果の根拠に基づく考察、自他の推論と研究論文や引用文献により考察して論述した。

V. まとめ: 4M 要因の傾向による各論をまとめて、総論と今後の課題について言及した。

## VI. 謝辞

## 引用文献

- 1)内閣府『高齢社会白書（平成20年版）』編集内閣府、東京(2008)
- 2)平成20年厚生労働省『人口動態統計』上巻323-327、東京(2010)
- 3)東京消防庁『家庭内における不慮の救急事故平成20年』、東京(2009)
- 4)大関親『新しい時代の安全管理のすべて』46-292、中央労働災害防止協会、東京(2007)
- 5)松江岳人、近藤優佳子、奥宮育子、栗本一宏「家庭でできるリハビリテーション 転ばない為の生活のポイント」『市立釧路総合病院医学雑誌』21巻1号149-154、(2009)
- 6)逢坂伸子「目くばり気くばり思いやり 安全・安心ケア 地域における転倒骨折予対策（解説）」『GP net』55巻6号53-57、(2008)
- 7)伊藤貴子「高齢者の住まいを考える・家庭内事故を防ぎ、生活機能を維持する住まい方（解説/特集）」『地域ケアリング』9巻7号16-19、(2007)
- 8)新野直明「高齢者の転倒による外傷とその関連要因」『保健の科学』第48巻第1号26-28、(2006)
- 9)松井利夫、鏡森定信「浴槽での不慮の溺死・溺水の記述疫学」『厚生指標』56巻2号16-21、(2009)
- 10)吉竹美佐子、窪田恵子「入浴習慣からみた在宅高齢者の事故要因の検討」日本看護学会論文集『老年看護』39号23-25、(2009)
- 11)播本雅津子「在宅高齢者の浴槽での溺死に関する検討（解説）」『創発：大阪健康福祉短期大学紀要』2号56-59、(2004)
- 12)松澤明美、田宮菜々子、山本秀樹、山崎健太郎、本澤巳代子、宮石智「法医剖検例からみた高齢者死亡の実態と背景要因」『厚生指標』第56巻第2号1-7、(2009)
- 13)内藤雅子「高齢者の住まいを考える・死因統計から高齢者の住まいを考える（解説/特集）」『地域ケアリング』9巻7号11-15、(2007)
- 14)渡辺修一郎「解決すべき健康問題の推移の視点から」『公衆衛生』Vol. 61 No. 3 148-154、(1997)
- 15)中村大介「入門講座 家屋改造のポイント 家屋改造の基本的な考え方と取組み（解説）」『理学療法ジャーナル』40巻1号53-60、(2006)
- 16)東京消防庁『災害と防災環境からみる高齢者の実態平成20年』26-31、(2009)
- 17)小池荘介『身のまわりの事故防止メモ』1-32、(1999)
- 18)(財)東京救急協会『家庭における救急事故の予防について』報告書、47-50、(1999)
- 19)東京都生活文化局『高齢者の転倒転落に占める履物と自転車の原因等、平成13年度高齢者の危害・危害情報分析調査報告書』(2002)
- 20)東京都生活文化局『高齢者の事故と生活・行動事故防止の方向と課題、平成12年度高齢者の危害・危害情報分析調査報告書』1-41、(2001)
- 21)国民生活センター『特別調査 家庭内事故に関する調査報告書—家庭内事故・その実態を探る』(1999)
- 22)(独法)国民生活センター『病院危害情報から見た高齢者の家庭内事故』(2008)
- 23)(財)共用品推進機構高齢者班『高齢者の家庭内での不便さ調査報告書—家庭内の危険、事故をなくすために—』(財)共用品推進機構(2000)
- 24)(財)長寿社会開発センター『高齢者の安全確保に関する調査研究報告書』(1998)